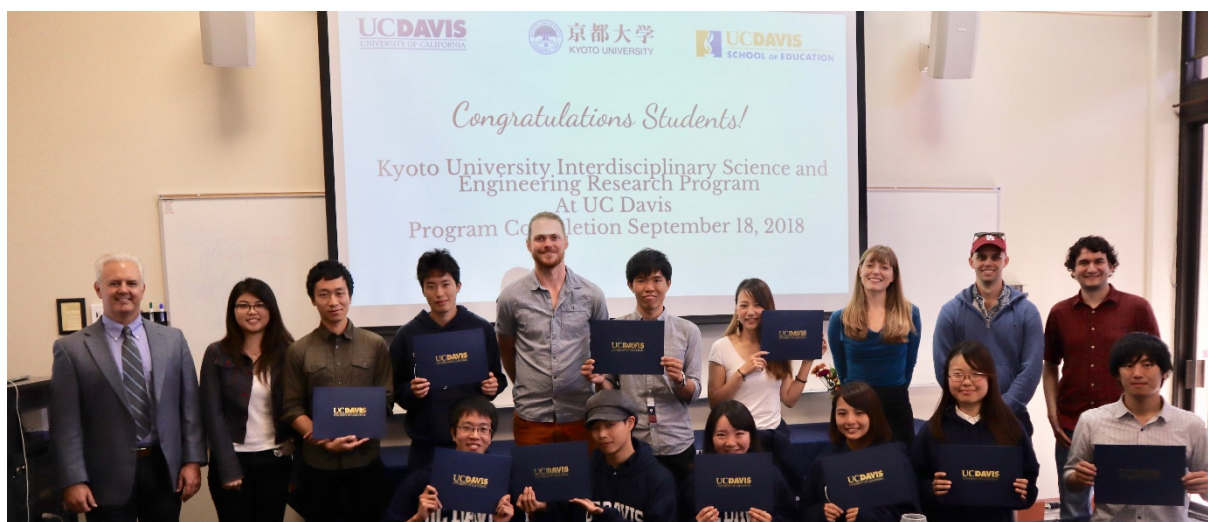


平成30年度
UC Davis (米国)

実習型・夏季短期留学プログラム報告書

Kyoto University Interdisciplinary Science and Engineering Research Program

UNIVERSITY OF CALIFORNIA
UC DAVIS



主催: 京都大学
国際教育支援室 (IEA Office)
工学部・工学研究科
農学部・農学研究科
経営管理大学院



INDEX

目次

短期派遣プログラムの今後 報告書刊行にあたって	3
プログラムの特徴について	4
分野横断型データベースプログラムの学修成果について	6
農学部・農学研究科の学生が本プログラムに参加する意義	7
An Interview with a participant from the Graduate School of Management	8
参加学生による報告	11
謝辞	16

実習型
夏季短期留学プログラム
2017年 8/25(月)～9/18(日)
Ryos Diversity Interscholarship Science and Engineering Research Program
UNIVERSITY OF CALIFORNIA
UC DAVIS
実習型・夏季短期プログラム@ UC Davis (USA)

本プログラムは、工学・農学・生命科学の最先端の学問分野を学ぶ機会を提供し、国際的な視野を養うことを目的としています。本プログラムは、UC Davisの各学部・研究科から選出された優秀な学生が参加し、10週間かけて学修を行います。本プログラムは、UC Davisの各学部・研究科から選出された優秀な学生が参加し、10週間かけて学修を行います。

プログラムの内容

本プログラムは、工学・農学・生命科学の最先端の学問分野を学ぶ機会を提供し、国際的な視野を養うことを目的としています。本プログラムは、UC Davisの各学部・研究科から選出された優秀な学生が参加し、10週間かけて学修を行います。

コース内容

1. Renewable and Artificial Intelligence (再生可能エネルギーと人工知能)
2. Renewable Energy and Power Solar System (再生可能エネルギーと太陽光発電システム)
3. Sustainable Interactions (持続可能な相互作用)
4. Ecology & Viticulture and Wine Business (生態学とブドウ栽培とワインビジネス)
5. Sustainable Agriculture (持続可能な農業)
6. Food Safety for Aquaculture (水産物の食料安全)
7. IT Innovation for Business Enterprise and Computer Engineering (ビジネス企業とコンピュータ工学のためのITイノベーション)
8. Entrepreneurship and New Business Development (起業家精神と新規ビジネス開発)

受講生は、学修期間中に、講義、実験、フィールドワークを行います。

プログラムの費用

本プログラムは、工学・農学・生命科学の最先端の学問分野を学ぶ機会を提供し、国際的な視野を養うことを目的としています。本プログラムは、UC Davisの各学部・研究科から選出された優秀な学生が参加し、10週間かけて学修を行います。

費用の内訳

項目	金額
1. 学費	10,000 USD
2. 生活費	5,000 USD
3. 滞在費	3,000 USD
4. 交通費	1,000 USD
5. その他	2,000 USD
合計	21,000 USD

費用の内訳は、UC Davisのウェブサイトから確認できます。

プログラムの申し込み

本プログラムは、工学・農学・生命科学の最先端の学問分野を学ぶ機会を提供し、国際的な視野を養うことを目的としています。本プログラムは、UC Davisの各学部・研究科から選出された優秀な学生が参加し、10週間かけて学修を行います。

申し込みの締め切り

2017年8月15日(月) 15時00分(日本時間)

申し込みの方法

UC Davisのウェブサイトから申し込みを行います。

お問い合わせ

UC Davisのウェブサイトからお問い合わせいただけます。

短期派遣プログラムの今後 報告書刊行にあたって

国際教育支援室長 森 眞理子

UC デービスへの短期プログラムが再開して 2 年目に入りました。今年度は大学からの補助金に加え JASSO 奨学金も採択され、短期プログラムで学生がより海外に行きやすくなる環境を整えました。UC デービス校のコーディネーターとの研修に関する協議も、円滑な連携が取れていましたので、内容は去年以上に充実していたと京大側の主催者の一人として自負しています。



ただ、募集研究科・学科が限られていること、それらの所属の学生への宣伝期間が短く、広報がやや少なかったため、応募者が 10 名となったことは唯一残念に思う点です。しかし学生数が少なかったことは悪いことばかりではなく、一人一人の学生が自主的に研修の取組みを深め、UC デービスの講義・学外研修にも積極的に参加する状況を自ずと作り出したようで、結果的に 10 名の研修であっても高い効果があったことは大いに評価しています。

こうした短期プログラムを今後どのような形をつないでいくか、それは京都大学の国際教育の大きな課題であると言えます。短期プログラムのあり方については、国際教育委員会も提案を重ね、いくつかの過渡的な試みを行っています。現在実施されているプログラムのすべてを今後そのままの形で残すべきなのか、さらに精度を上げて学生の語学・教養ないし専門教育に資するプログラムを形作るべきかについてまだ結論は出ていません。学内で取り組んでいる多くのプログラムを一度整理し、分析・検討して、よりよいものに改善していく余地は残っていると考えます。

学生が海外で学ぶことは、帰国してすぐに役立つことばかりではありませんが、その学生が世界との距離を自分なりに体感し、消化し、それが彼らの次の行動や将来の生き方を支え、また展開させる可能性があるなら、大学の国際教育の使命は、彼らにその機会と場を提供することではないかと、私自身は考えています。今後の京都大学の短期派遣プログラム、またこれと裏表の関係にある受入れプログラムも含め、効果的な学内システムの構築が期待されます。

終わりに、UC デービスへの夏季短期プログラムの企画及び事前講義、発表会等の実施にご参加くださった各研究科・学部の先生方、ご支援いただきました職員の皆様方に心より感謝申し上げます。

(2018.9. 30 記)

プログラムの特徴について

工学研究科附属工学基盤教育研究センター

西川 美香子

プログラムの概要 (UC 実習型・夏季短期プログラム)

本プログラムは、工学・農学・経営管理の三分野からなる分野融合型の講義とオフキャンパスでの課外研修からなる海外研修プログラムで、今期で5期目の派遣となりました。主たる目的は、学際多様な講義および研究課題に応じた研修を通じ、国際社会で必要とされる実践力、行動力、語学力の3つを磨き上げること、対象者は工学部・工学研究科、農学部・農学研究科および経営管理大学院に所属する3年生以上～院生の上級生です。平成30年度は10名が本プログラムに参加しました。プログラム期間中、各テーマに関連する地域の企業・団体を訪問し現地調査(site-visit)に参加しましたが、本年度のテーマは1. バイオケミカル・イノベーション、2. IT イノベーション、3. 持続性ある農業の3課題に取り組みました。

事前準備

渡航前に、各関係部局の構成員からなる「準備支援講座」(毎週水曜・6限)が英語で開講されました。また「英語事前支援講座」では、公益財団法人・日本英語検定協会のもと、学内 IELTS プレテストを実施、このほか英語プレゼンテーションの基礎を学び、神戸大学より木原恵美子先生ほか数名の学生を招待し、共にビデオ動画を使った日本の科学技術を魅力的に伝えるプレゼンテーションのコンペを本学の国際交流セミナーハウス j-POD にて開催しました。準備には留学生TA(3名)も加わり、これらの企画がスムーズに運営されました。当日は、特別審査員として工学研究科長の大嶋正裕先生がプレゼン審査を行い、ベストプレゼンテーション賞を「カップ・ヌードル」についてビデオ動画を作成した Miho Yoshida & Risako Sho ペアに進呈いただきました。

準備支援講座の様子

近藤先生



Baber 先生



跡見先生



榎木先生



八木先生



西先生



現地プログラム

カリフォルニア大学デービス校が京都大学向けにカスタムメイドしたプログラム内容で、コース内容は主に

- (1) プレゼンテーションスキル 13 時間
- (2) アカデミック科学技術英語（中級レベル） 13 時間
- (3) フィールドワーク・チュートリアル（事前準備・事後指導） 8 時間

上記のモジュール以外の時間に、フィールドワークがテーマごとに 4 か所にて実施されました。参加者は英語を集中的に学ぶとともに、調査内容をまとめ、発表用資料を作成し、最後はグループごとにプレゼンテーションを行う発表会を現地と帰国報告会にて行いました。今年からは「Conversation Partners」ということで、現地の学生（student ambassadors）を京大生 2 名に一人ずつ配置することで、同年代の学生と英語で触れ合う機会を出来るだけ日常から多く持てるような工夫も取り入れました。

帰国報告会

平成30年度9月26日（水）にKUI NE P教室において、現地での研究課題発表を英語による成果発表を実施されました。国際教育支援室長の森先生の挨拶に始まり、工学研究科から榎木先生、農学研究科から神崎先生、経営管理大学院から河野先生が学生発表の評価を行いました。参加学生らは、準備講座に参加した時からは想像できないくらい自信に満ち溢れており、彼らの伝えようとする姿勢と、骨組みを考え筋の通った英語発表に、この3週間の成果を十分感じとることができました。リーダーの庄さん、長谷川さんの判断力とリーダーシップにも感謝したいと思います。そして社会人の丸本さんの行動力をはじめ、参加者一人一人の意識の高さに感動しました。これも部局間を超え、多くの教職員の皆様さまのご支援があったことです。改めて、お力添えくださった全教職員の方々に御礼申し上げます。最後にこれまで種々の短期派遣プログラムの企画・運営全般に渡り、ご尽力くださいました国際教育支援室・室長の森真理子先生にこの場を借りて厚く御礼をお伝えしたいと思います。



英語準備講座の様子



分野横断型データベースプログラムの学修成果について

工学研究科 機械理工学専攻 教授 榎木 哲夫



本年も昨年に引き続き、UC Davis での海外研修プログラムが実施され、工学・農学・経営管理の三分野から参加者を集めて無事終了しました。工学研究科附属工学基盤教育研究センターの西川美香子先生には、派遣前の準備講座や派遣後の帰国報告会を含め、そのご尽力に改めて感謝申し上げます。とくに今回は帰国時に関西国際空港が台風被害で閉鎖され、帰国日までに復旧なるかどうか危ぶまれる中であって、西川先生によるきめ細かな参加者への情報提供がなされていたと伺いました。海外研修時の危機管理の重要性に改めて気づかされる機会になりました。

派遣後に開催された帰国報告会では、3つのグループから研修の内容について報告されました。まず「持続性ある農業 (Sustainable Agriculture)」のグループからは、食物に関する日米国民の意識の違いが浮き彫りにされ、技術と人間、安全と安心 (遺伝子組み替え食品)、という壮大かつ普遍的なテーマにも繋がる興味深い内容が報告されました。米国でのコミュニティをあげて問題に取り組む体制や参加意識、コミュニティとしての学習に触れる機会が持てたことは、参加者にとってかけがえのない機会になったことでしょう。次に「日本で IT を普及させるには (How can we popularize IT technologies in Japan?)」のグループからは、IT の先導的導入事例を調査し、自家用車のビッグデータ解析、塾における教育での導入、そして企業におけるイノベーションと R&D のマネジメントへの導入について提案がなされ、日米協働によるビジネスモデルについて考えさせられる内容でした。そして「バイオケミストリと生活 (How does biochemistry contribute to our lives?)」のグループでは、化学と生物学が結びついた異分野学際領域の成果がどのように私たちの日常生活を変え得るかについて報告されました。発表者からは、化学の専門を勉強している立場から生物学という異分野の学問との共通点や融合点に気づかされたとして、学際研究で知り得た驚きを含めて感想が述べられました。

以上の報告からも明らかなように、参加者諸君にとって本プログラムへの参加が、普段は接することのない内容を新しい刺激として、それぞれの専門分野での個人の限界を拡張し、世界と関わるための感受性や視野を広げることにおいて、確かな学修成果が得られたことを確信します。このような有意義なプログラムの今後の「持続性」に向けて、自身も含めた関係者皆様のご協力をお願いしたいと思います。

農学部・農学研究科の学生が本プログラムに参加する意義

農学研究科 地域環境科学専攻 教授 縄田 栄治



昨年度に引き続き、国際教育支援室・森先生および工学研究科・西川先生の尽力で、UC Davis での実習型夏季短期留学プログラムが実施されました。農学部・農学研究科からは4名が参加し、非常に有意義な時間を過ごしたようです。今年度、私は本プログラムの実施にあまり貢献できませんでしたが、実施に協力した本研究科の近藤教授、神崎教授から下記のメッセージが寄せられていますので、それを紹介したいと思います。

近藤教授

今年も、派遣前の準備講座の一コマとして農学からは6月13日（水）に“Difference between American Large Scale Agriculture and Japanese Small Scale Intensive Agriculture”のタイトルで持続的農業を行うための講義を行った。特に、アメリカの大型機械を使った合理的、高効率の農業と一粒ずつのコメの選別作業に代表される日本のきめ細かな農業との違い、ミカンの表皮についてピンホールをも見分けて腐敗を防ぐ技術等を紹介すると共に、トレードオフの関係にある食料生産と環境保全問題の同時解決を農業のみならず畜産、水産においても目指す必要があることを講述した。すると、農学の学生のみならず、参加学生から多くの質問が次々に飛び出し、質問時間を越えて大変活発な問題意識の交流が行えた。アメリカ滞在中にも、大型ほ場を垣間見る時だけでなく、スーパーに立ち寄ったり、食事をする際にもそのような意識をもって過ごしてくれたものと確信している。

神崎教授

9月26日に京都大学で開催された報告会では、3つの班が持続的農業、IT技術の浸透、バイオテクノロジーというテーマで研究内容を報告してくれた。いずれの発表もカリフォルニアというイノベーションの聖地で、いろいろな企業、研究者、コミュニティーのチャレンジに触れて、大きく感化されて共感するとともに、なぜ日本では？という疑問に真摯に取り組んだことがわかる発表だった。私たちの質問にも堂々と答え持論を展開する様子を見ても、参加者の皆さんが今回のサマープログラムを通じて大きく育ったことが実感できるとても良い発表会であった。

残念ながら、諸般の事情でこのプログラムは今年度をもって終了することになったということですが、森先生、西川先生をはじめ、プログラムの企画・実施に尽力頂いた方々に、心からお礼を述べたいと思います。ありがとうございました。

An Interview with a Participant from the Graduate School of Management

経営管理大学院 准教授 Will BABER



Graduate School of Management student, Mizuha Marumoto, spent three weeks in California this summer observing, listening, and learning. She attended an evening of presentations in June related to the study program at UC Davis including mine on entrepreneurship. She asked pointed questions which helped bring out all the ideas in my presentation. I caught up with her in October to find out about her experience in California.

As a Service Innovation student, she is a sharp observer of how people behave and live. Service is built on interactions among people. In order to develop great services and meet the needs of customers, it is necessary to know what these people do, think, feel, and generally how they live. Her interest in these matters made the trip a powerful experience. She stayed with a US family as a Homestay Student. That meant living with them throughout the day, a rare chance to really see how Americans live and compare that life to Japanese life. This is especially important regarding times of the day when a family rarely interacts with other people – breakfast and the process of “getting out the door” as individuals leave for work, school, and so on. It also includes late evenings when the family settles in after meals, clean up, homework and other domestic activities. This experience, Marumoto tells, was a highlight of her trip. A three-week journey into the heart of American family life.

The academic side of the trip included classes and visits to businesses in California. This program included no less than four different companies, all of the leaders in their fields: Intel, Hewlett-Packard, ALUVA Networks, and the UC Davis Research Center. In each location, students were able to directly speak with executives and see how work progresses. Some of Marumoto’s insights from these visits:

- Hewlett-Packard’s production site looked in many ways Japanese. This observation underlines how much Good Practice has moved from Japan to North America regarding clean, high throughput, worker-centered production that includes Just in Time design. Indeed, Hewlett-Packard’s Tokyo plant has been often ranked it most profitable one.
- Intel and other sites showed how multicultural values and priorities could work together despite diversity.
- Quick reaction was built into some of the companies visited – decisions can be made at frontline or lower levels of the organization and do not need to be escalated. That saves time wasted on management reviews and approvals.

- “Progressive” was a keyword regarding work style. That is to say, change is good and organizations actively look for useful changes to make.

Marumoto went with a research question in mind, “how can we popularize IT tech in Japan?” She took this question to no fewer than 10 different technology managers. Three weeks in California turned into a remarkable data gathering effort! Not satisfied with just the companies included in the UC Davis program, Marumoto took off to see more. She used Uber to go all the way from UC Davis into the heart of Silicon Valley, over 2 hours of driving. But with cost-sharing among other students, the Uber trip was far faster and cheaper than trains and public systems. By taking the initiative, she racked up additional visits to Fuji Xerox, Honda, Toyota, and Xerox.

Overall, it was a powerful trip in terms of study and life experiences. The University of California, Davis came through with a good program, the homestay was comfortable and interesting, and the town of Davis was safe, pleasant, and easy to manage by bicycle.

UC 実習型・夏季短期プログラム

準備支援講座

平成30年度実施スケジュール



場所：吉田本部構内

国際交流セミナーハウス j-POD

UC DAVIS
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

5/
19

(土)

9:00 – 12:40 **International English Testing System (IELTS/Pre-test)** 吉田国際交流会館
Free Sample-Test
12:40-13:45 **Lunch Break**
13:45 – 16:30 **The Effective Presentations in English**
-Lecture
- Group works
- Guidance: Rules for presentations
-Tips & Advice

6/
6

(水)

18:15 - 18:45 **Sustainable Infrastructure and Civil Engineering**
A Special Lecture by **Professor Tomomi Yagi** (工学研究科)
Graduate School of Engineering, Department of Civil & Earth Resources Engineering
18:45 - 19:15 **Entrepreneurship and Venture Business**
A Special Lecture by **Associate Professor Will Baber** (経営管理大学院)
Graduate School of Management

6/
13

(水)

18:15 - 18:45 **Difference between American Large-Scale Agriculture and Japanese Small-Scale Intensive Agriculture**
A Special Lecture by **Professor Naoshi Kondo** (農学研究科)
Graduate School of Agriculture, Division of Environmental Science and Technology
18:45 - 19:15 **Robotics and Mechanical Engineering**
A Special Lecture by **Professor Tetsuo Sawaragi** (工学研究科)
Graduate School of Engineering, Department of Mechanical Engineering and Science

6/
20

(水)

18:15 - 18:45 **Biochemical Innovations for Applied Chemistry and Chemical Engineering**
A Special Lecture by **Professor Haruyuki Atomi** (工学研究科)
Graduate School of Engineering, Department of Synthetic Chemistry and Biological Chemistry
18:45 - 19:15 **My Two-Week Experience at UC Davis Extension and Recommendations**
A Special Lecture by **Junior Associate Professor Masayuki Nishi** (工学研究科)
Graduate School of Engineering, Department of Material Chemistry

7/
7

(月)

10:00 – 11:30 **Group Presentations (Oral)** 吉田国際交流会館
11:30 – 12:00 **Lunch Break**
12:10 – 12:50 **Poster Presentations**
13:15 – 14:30 **International Round-Table Discussions**
14:30 – 15:00 **Closing**

Students' Reports

参加学生による報告

Biochemical Innovation Group

(グループリーダー★)

★工学研究科物質エネルギー化学専攻 修士2回生 麻植 雅裕

工学研究科高分子化学専攻 修士1回生 庄 璃沙子

私たち biochemical innovation グループは、2つの企業と2つの研究室に訪問し、“How does biochemistry contribute our life?”というテーマでプレゼンテーションを行いました。人数が他のグループよりも少なかったですが、お互いの長所を発揮し、最後まで遣り遂げることが出来ました。

1. CADE winery

カリフォルニアワインの生産地として有名な Napa valley にあるワイナリーの一つです。ワインの製造プロセスを見学させて頂きました。ワインのプロセスにも biochemistry が密接に関連していることはとても驚きでした。



2. Novici Biotech

バイオベンチャーの一つで、タンパク質工学を得意とし、医薬品を安く製造する研究をしています。大量栽培可能な植物を用いて、医薬品の原料のたんぱく質を製造するという興味深い研究を行っていました。アメリカの会社について教えていただき、大学と会社の違いやアメリカの会社と日本の会社の違いについて学ぶことが出来ました。

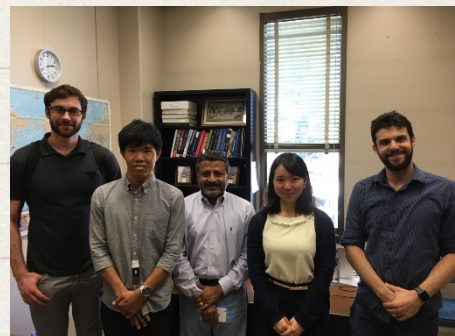
3. Atsumi laboratory

微生物を用いて、有益な化合物を合成する研究を行っていました。Prof. Atsumi は日本とアメリカの大学の両方を経験しているため、日本の大学とアメリカの大学の研究を学ぶ良い機会となりました。

4. McDnald/Nandi laboratory

研究室レベルの小スケールの反応をどのように工業化スケールにするかをテーマに研究が行われていました。私たちの研究は基礎研究なので、このような研究室を見学させて頂けたことで、ただ化合物を作るのではなく、商品化を考えて研究を行うことも大事だと実感できました。

普段の研究室生活、さらに日本では体験できない経験を通じて、当たり前が当たり前でなく、日本から出たことがなかった自分の視野がいかに狭いかを実感しました。学んだことは書ききれませんが、得た経験を大事にして、これからのキャリアに活かしたいと思います。



IT Innovation Group

(グループリーダー★)

★工学部 物理工学科 2 回生 富江 伸太郎

経営管理教育部 経営管理専攻 修士 1 回 丸本 瑞葉

工学研究科 電気工学専攻 修士 1 回 稲垣 翔太

工学研究科 原子核工学専攻 修士 1 回 中川 雄貴

我々のグループでは、「How can we popularize IT technologies in Japan?」という問いを設定し、調査を行いました。本グループのメンバーは、日本のイノベーション創造力が低下していること、先端技術活用が中欧米に比べ遅れていることなどを憂い、問題意識を持っているという部分で一致していました。そのため、最先端の IT 技術を日本で活用するために何が必要かということに焦点を合わせました。

以下に調査内容を記します。

1. Hewlett Packard (HP) Enterprise

この事業所は日立社と提携しており、法人の社員さんがいらっしゃいました。主に日本の企業とアメリカの企業の姿勢の違いについて調査しました。

2. UC Davis Academic Technology Services (ATS)

UC Davis へ教育リソースを提供する施設へ訪問しました。ここでの教育技術は、Google Form や MOOC の活用といったものでした。

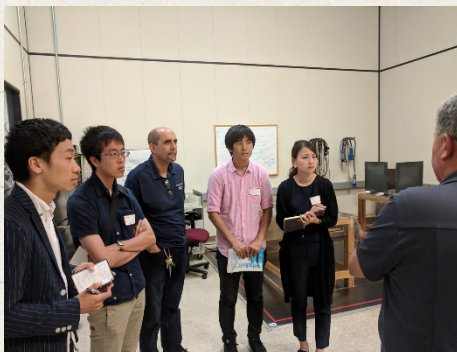
3. Intel Autonomous Driving Group

自動運転業界での覇権を狙う Intel の開発チームに話を伺いました。その結果、自動運転技術は成熟していて、2021 年に市場へ大規模投入することを各社検討していること、日本トップの自動車会社トヨタの動きはやや遅れていることがわかりました。

4. Professor Zhou Yu's Research Group

非言語的コミュニケーション解析、Alexa による会話のデモンストレーションを見学しました。

この他に自分達で連絡を取り、トヨタ、富士ゼロックスの研究所へ伺いました。調査の結果、日本企業の停滞の原因は技術レベルではなく、前例主義、稟議などにより先進的な技術を取り入れづらいシステムにあることを認識しました。これらを改善する手段として、Honda R&D における開発システムや、自動運転・教育におけるビジネスモデルを報告会にて提案しました。



Sustainable Agriculture Group

(グループリーダー★)

★農学研究科 地域環境科学専攻 修士 1回 長谷川 智彦
農学部 資源生物科学科 3回生 加藤 樹里
農学部 資源生物科学科 3回生 三浦 國弘
農学部 資源生物科学科 3回生 吉田 美穂

今回、Sustainable Agriculture グループは4つの研修先に訪れ、有機農業、環境対策、遺伝子組み換え作物、持続的農業に関する技術を学びました。

以下研修先を紹介します。

1. Blue Diamond Almond Company

Blue Diamond Almond Company は世界の80%のアーモンド生産量を誇る会社であり、ここでは加工工場、アーモンド畑、研究所を周り、持続的農業を営む農家や食品業界で働く人々から話を伺いました。加工工場ではアーモンドの殻を複数の機械で外す工程を見学し、アーモンド畑では農業機械でアーモンドの木を揺さぶって落とすところを見学しました。

2. UC Davis Student Farm

UC Davis では経験を通して学ぶことを重視しており、学生が農業をできるように Student Farm を持っています。学生はこの農場で作物を栽培する以外にも農場の設計をしたり、子供向けの体験イベントを開催したりと農業に関することであれば能動的に行えます。

ここでは、学生と運営員の方から持続的農業における地域共同体と関わり方や持続的農業の多面的な栽培方法を学びました。

3. Daine Beckles Lab

Daine Beckles Lab はポストハーベストに関する研究を主に行う植物科学専門の大学研究室で、研究室内、グリーンハウスを見学しました。現在のアメリカでの遺伝子組み換え作物の研究状況や、研究者としての遺伝子組み換え作物の利用に関する意見を伺えました。

4. Full Belly Farm

Full Belly Farm は大規模な有機農園で自分たちで生産から販売までを行っており、ここでは様々な野菜や果物の農場と箱詰め作業場を見学し、被服作物や灌漑、コンポストなど有機農業を運営する上で重要な技術を学びました。

各研究先で各個人のトピックに関する様々な情報や施策、意見を得ることができ、メンバー全員がおのおのの持つ疑問に何らかの解決の糸口を見つけられました。



ホームステイ先での思い出

工学研究科高分子化学専攻 (M1)
全体リーダー 庄 璃沙子



私がお世話になったのは、仕事をされているアメリカ人のホストファザーと、フィリピン人の専業主婦のホストマザーのご夫婦でした。お二人ともとても親切で、穏やかな方でした。ホストファザーは出張が多く、期間中半分以上家にいませんでした。私の他に日本人の女の子がもう一人ステイしていたため、ホストマザーと私たちの3人で過ごすことがほとんどでした。

最初の数日は、私の英語能力が拙かったことと、フィリピン訛りの英語に慣れていなかったことから、会話もあまり弾まず、もどかしい思いでした。しかし、あらかじめ質問を考えておいたり、わからなかったところは正直に聞き返したりするうちに、自然と会話が増えていきました。夕食後のおしゃべりの時間が日に日に長くなり、時間を忘れて話し込んだことがとても心に残っています。ホストマザーが初めて自分の家族のことやこれまで行った

旅行のことなどを話してくれた時は一気に距離が近くなった気がして、とても嬉しかったです。

また、留学期間と私の誕生日が重なっていたため、小さなバースデーパーティーを開いてくれました。手作りのケーキを用意してくれて、部屋にはバースデーカードも置いてあり、本当に素敵な誕生日になりました。

特別派手なホームステイではありませんでしたが、ホストファミリーが本当の娘のように接してくれて、家族の一員になれたと実感できました。ホームステイを通して、英語を話すこと、聞くことになれることができ、また、アメリカに第二の家族ができたことは私の中でかけがえのない財産です。これからもホストファミリーと連絡を取り、このつながりを大切にしていきたいと思っています。



日本と米国の教育環境の差について

農学研究科地域環境科学専攻（M1）

全体リーダー 長谷川 智彦

今回 UC Davis の夏季短期留学のプログラムを通じて、日本とアメリカの教育環境の違いに関し印象に残ったことはアメリカでは分野を横断したプログラムに学生が主体となって取り組んでいることです。今回はその中でも特に SLLC（Sustainable Learning and Living Community）に関して紹介します。

SLLC は UC Davis で行われている統合型プログラムで、様々な組織（Student Farm, Compost, cooperative student housing, a community garden）が含まれており、持続的農業に関する取り組みを行っています。例えば、SLLC 内の 1 つの組織である Student Farm では学生が大学側から農園をレンタルし、そこに自作したい作物を植え栽培できます。栽培をする際にはペストを抑えるための多面的な方法をとっており、これらは大学側のスタッフのサポートの元行われます。この Student Farm で特徴的なのは、学生たちが自分たちで企画をたて、主体的に運営していることで、収穫した作物の販売や、地域の子供たちに向けた農業体験教室を開催したりなど様々な取り組みを行っていました。

この例のように大学側から提供された企画に学生が参加するのではなく、持続的農業に関する企画を学生たちが考え、主体的に動き、大学はその補助をするという形式は日本にはあまりない教育環境であると感じました。

また、SLLC は農学部 of 学生に限らず様々な分野の学生が参加でき、いろんな分野の人と交流する機会があります。さらに、地域の人々にも協力してもらおう機会が設けられており、学生は企画を通して地域の方々と意見を交換し、議論することができます。こういった異分野や地域の人々と交流する機会が多くあるのも日本にはまだ根付いていない教育制度であると感じました。



謝辞

UC 実習型・夏季短期派遣プログラムが無事に実施でき、この報告書を出すことができたのは、企画、運営、実施のために熱心にご指導およびご協力いただきました諸先生方および職員の皆様のお陰です。特に国際教育交流課長・尾形さま、掛長・植村さま、そして青木さまをはじめとする職員の皆さま、ならびに国際教育交流協議会（CIEE）日本代表部のご担当者の方々、とりわけ副本部長の平出さま、ご担当・渋谷さま、カウンセルトラベルの得永さまには大変お世話になりました。心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞といたします。

★研究科長

工学研究科（あいうえお順）

合成生物化学専攻	教授 跡見 晴幸 先生
化学工学専攻	教授 大嶋 正裕 先生★
機械理工学専攻	教授 榎木 哲夫 先生
マイクロエンジニアリング専攻	教授 鈴木 基史 先生
材料化学専攻	講師 西 正之 先生
社会基盤工学専攻	教授 八木 知己 先生

農学研究科（あいうえお順）

森林科学専攻	教授 神崎 護 先生
地球環境科学専攻	教授 近藤 直 先生
地球環境科学専攻	教授 縄田 栄治 先生★

経営管理大学院

経営管理研究部	教授 河野 広隆 先生
経営管理研究部	准教授 William-Wilmer, Baber 先生
	特定職員 豊野 由紀子 様

国際教育支援室

室長
名誉教授 森 眞理子 先生

工学研究科附属工学基盤教育研究センター

講師 西川 美香子

On behalf of UC Davis program instructors, staff and student assistants, it was sincerely a positive experience meeting and learning about the ten Kyoto University students in this years' program. From the beginning, instructors realized that the students were intelligent, motivated, mindful and inquisitive. For instructors, staff and conversation partners, it was reassuring to see that the students did not shy away from engaging in English conversations, whether academic discussions or daily exchanges. And there were students who were genuinely motivated, and even enthusiastic, in taking initiative to approach and engage in English. The three research groups, Sustainable Agriculture, IT Innovations and Biochemical Innovations worked very hard together, especially as they learned through site visits and clarified responses to their research questions to develop final presentations. The groups' final presentations, both visually and orally, reflected very serious and diligent preparation with analytical and insightful explorations of real-world-problems involving how food, biochemistry and technology impact our lives.

Sincerely,

Peter Hendricks,
School of Education, Global Education Programs
University of California Davis.



